花傳書

安部性
薫路
孫芳海
遺志を汲ミ

手向の花の集れること以てとう
かくさきんとや咲まちたものと
まことあつまえて集凡花のさかりし
ちるを縁 芳ニちう事 雑 筵をと
まうけ おくさきてまでもみし
席にみつちるえくめくられハ
手枝葉まで下にちりつこをここえあり

嵩子も帝人を出さでもよし千
めでまき花の供養ともなりぬる

天保三文亜居晩夏

湖東　里臺

里臺

花供書集

鞁立ハ梅よりかろき桜哉　麦洋

帰るふりあきゝ叩先の鴨　千崖

らんておく蛻翁よ夜のらぬれて　梅通

こゝつけ由を詞忘まじ陰　並隆

町並にかしひつきむ林あと　榛堂

花筏おろせハゐるの御くる　喜楓

月ひよんあほへ投ける薄の月　杜鶯

ちよろと春てもしけ彩　芹舎

居風呂の友付多き秋の市　斗文

影に帽のかくしや西　其成

野心も先うし浮きのおろ賣　杜蓼

縫ひえなき岐阜のあいかけ　楓下

立ふうし遠衣の布施と包すく　田義

冬籠さハさしつあもむう　芳英

雪起し来てなる八路りしく　梅價

吹草挨りの屁さまりり　十海

牛気の台盆に長き月哉　月峯

なの雛乃傍をかくれ虫　雲光

咲もせぬ河菜を匂ふ贄を折　萩閑

綠の香ふかけし立つ夢　南渓

板並へ咲きむ花も髭し　鳳也

古巣は土をそこふてる　佛笑

都年りは中孔の虫る家　林曹

溜上りふてまつい南吹ふ　神六

雲隠し井戸の扇子小一町　素翁

投蔵のうちも経ぬ又追人　北洋

返りかし影を簾のうちに残して　百池

孺伴の鞠乃よしぬ花すゝき　其雅

大影庭の生木處ゝ子出まり　一風

未見て見えし仙氣ある　甫峨

右百員一順下畧

天保三辰年
花供養會

落花にましりや軒の花經聲　よう女

其かせの鞠乃なびき渡り　蒼虬

百まへの雛子ハ御先へまかせ　芝隆

小蒔北舟をとり居る人士　貨僕

ちりかゝる一花よこしぬ古道具　烏頭雄

松蘂の嬉しもちらしさえる　抄雀

ましやくやと内輪をかりの月見舟　兆三

爺色りしもまだし蛛柱から　呉明

藤あるハよいと藜のかりた足　芹舎

年よけるまで婿をくれさぬ　克雄

縁のあるうち上の枝持も取退く　月峰

いつても紬子出る　さえ風　乙雅

若山ハ小松もなりのまんなりと　佛孚

籠を休めて足袋結ふ立　月坡

咲草ふく膝のおとゝ続しとき　風也

寂しや石部のこゝと退出ス　南径

討とあふまゝ夜まきりふ去の月細く　鐵之定

結縷鰹ふる店のちいさき　杜蓼

まきとゝ子なりもつまおりて気合て　百地

八百ほつく柳ひ末の枝　乙龍

鎗先も横糊ゆりの出身様　樵半

原ふ知らして気ぬ豆板　神谷

山ひとつ無理鎌しさる日の入き　几乙

つとしあてきしまの浮あさ　蘇杖

紳鮒ふ鰊味噌汁をふひ見え　学鳥

ちよ川と小鼓てきる比料肉　杜鷲

紐をなり安房にあふきき緒紺布　蘇楓

梭ゥ御て清水よし　あふれ　とせ女

耕立ハ入院とても待ておき　衣白

あつしくて足の拵かへし　其雅
叙蔵の出かけ大に吼つゞき　梅價
何ごとも野の德りおはさ　花閑
殘漆の無病な藪に尿さしく　十丈
千とのもとりし千顆の房　其独
うらんで花をかけ風呂の森　素山
二三月禄置も留らえぬ　云来
きつてある捕八次第の自ひ立　柱翁
附今度かれ爰のとりつき　是冲

汁なりを変も日暮のいそかしく　鳴渺
うき場の徑を鏡りてのむ　其成
かきさけも今に忠しね落相織　丈翠
用うふしてもえをつんまえる　醉寄
右一順下畧

十二八
おそれれハお拵い花ある都かな　幾也
ひやしとなりて色の木蔭哉　鹿女
草木のをしに奥荷の走る徑かな　橘子

心持てみても気味し雛子の影　葉翁

青柳もみたるゝ藪も静きなりけり　杉隣

山里や蔦ゑとまける一二丁　自楽

鶯の蔦の巣まて啼まけり　蟻兄

糸くるゝ吟定えゝる田螺哉　福来

人渡し側返てた川楊　杉子

水ありと見えて光るや青柳　月桂

船頭の舟子もみしの春の月　眉岳

浮来て鶯来を捨なりけり　之中

呼雛子にたゝりくさし月夜哉　祇白

イタミ
梅か月亭をたゝ今戻りけり　退歩

ひとやうに梅折々とりしや柳桜　陽樹

古庭法くる本坊出て

又おもしつゝあけつ花の牙舎　十二八 幽芳。

信貴山にて

又たゝ見して花ちりしきよしめ哉　伊丹 芳方

花出て牛にかゝりかゝる糸　太乙

いさりの春きよとし西の子日哉　鳴く

かい子よ人あし花のちる迄ハ手将　丈

好来してりもおりし梅の花　兵庫 墨巣

碎て折梅七八分なかりけり　印南

花に杖を掛てあふむき天気哉　万雅

此家をかるや古屋の梅時分　止鳥

花の夜や鬼子もあまたに従もとり　业窠

阻余ふて雛買ふて母まち居哉　徐全

ほんのりと花ハ木の月よ夜明けり　梅洲

土器の落る音や花のちる　百尺

菜の花やあらぬ方に出来れ咲　月佛

ちるよ来持て来ゝ夜も月哉　淡水

梅咲てそこらあかるし畠の縁　南喬

俳諧歌仙行

そよれハちらしにあらぬ里の梅　蒼帆

東風に小気の押しる日の入　白樂

出るまなる千鯉のそりを得て　帆

鼻にかゝつき皆のとのひ　乐

牛の子引よせて通る背の月　帆
大体よろる新ごろの盛　采
盛をしれ房りし尾を並ゑて　帆
志れさ風呂日を離る花の白　采
豆も赤とほしてぐんぬ草袴　帆
よい娘を又も来てより　采
長梅雨不続つき合の茎田の間　帆
おほきな菓子の跡る亭塚　采
腕てある宿も流行の摩琢て　帆
拳をつくむ言の一ちきつ　采
娘判ても見て雇を追返し　帆
出代るまでハちよつと親分　采
何ぶきかくと味噌摺る花盛　帆
従来の百人扈む社家町　采
地祭よけ咲る馬を並び　仝
春の庭かし子供等うたき　帆
八方の灯も秋をくちろしと　采
義理なき無をとふ仕切る　帆

風颪引よせて衾かぶり　楽
櫛を拾ふて加賀の噂きく　几
相撲とりし右手ハ左手ゟ勝て　楽
条幡形りのうとき立つけ　几
帆まけにつゐ志らく春秋冰　楽
法まて庵の気休日うちある　几
下戸が八はつく鳴る月の前　楽
桜多も旅を人並はゆへ　几
秋ゑにかゝりて纏まとまき上り　楽

かし家一軒売りして盃　几
ともしと何腰をりしも華遊　楽
はた菜汲ハ侍りて乳りをとる　几
名ろしく乙花の遅速も手摘あり　楽
枕出の道にて古ゑを示す足　几
六
いく先に書おしらえて阿やの猫　伊丹　園　釈
我てうつ浮山にある桜う家　麦村
井の隅へ出して咲くて摘子な　市　いせ府

海の果ありや木の芽ニ春の水 三ツ谷 坐藤

鶯や啼へ出てる枝もなく 四日市 宇栗

春風にすも花ニ捨てや六七日 仝

うしろより戸ハ出てるむの山 柏梁

汐風にかまはぬ梅の匂ひ哉 サイキ 滄洲

山里ハ雪のしほるり春の風 井内 可遊

鈴なくやるもしぐりまの中 江月

花の山笠ハあるきにかゝりけり 相可 梅義

乙鳥の藻や麦の枯わずき 三延田 汲古

けふ雲のとりつくむの木かげ哉 山田 薫舟

静なり月をおもうて冬の桂哉 杉堂

菜を水にそふや鶯さそふ哉 潮花

一声ハちつゝもかゝりつむき哉 尾張ナゴヤ 浴路

花もあし足てまだくや風の糸 雨石

鶯にそゝぶかされて二三町 秋蘆

向ひ合柳かれてまゝさき花 梅裡

吹まわりに花されもせぬ胡蝶哉 宮 秀外

伸る馬とうけてもあしらぬ柳哉 岩ノ内 旭湖

末ありては花もつ桂かな　宜秀

菜種咲畠やさしや峰の奥　三河 卓池

行燈をせうむ子供や松の内　赤志

燕やあさま岳のかすみより　三岳

手折らるゝ枝も余所へ出る勝手哉　蓬宇

貸す家の行ても出来た桂かな　香可

山の雪解るふして八水清し　流芝

晴るゝ八鳥居の鳥ゝ梅の花　朱芳

咲時の来て咲よりの薮の梅　梅老

土嶋の春へて来る桜かな　氷角

鶴の目をさゝる門のかざりかな　待亮

ともしまぬ骨の幽やまゆの雪　梅岳

陽炎の立そふして橘の葉　稲居

万葉を一帖に越尽し哉　松東

茶の色や花に来て行子のきハ　一慈

是ほとの川を吉野に越えたる哉　塞馬

送り花の常たのむや安房　南畝

柳ちるゝし田原の田の錦　波文

山桜やりうるをかりの月夜哉　沙青

花ものよこす日なかき春の風　甲斐 雷石

椽先や織ましくし蝶の夢　伊豆須代 守中

夜をまもしゆふ節のつゝ鼓　江戸 素芯

枯ものかくも強かり梅の色　大梅

芝をさるの田今年ふりや梅の色　丁知

鶯や羽の雲あらひしふく　麻支

山吹やうつくしく咲かをる　有序

枝村へなかりつくや夕柳　幻芝

かくて来る勝者一つや梅の色　萬須

散る花ちりて五條もおもう色　得芸

鶯や引と藪先りまる一羽　抱儀

押合ひて鴨のかくさやまきさ　茶静

屋根あつく猫子もかるる幾代　小園

初桜目かけまなつてあるし　禾葉

おもろよき人をとりのさて年男　畝古

鶯や雲ゐのそらてなく　八朶

こしひきをのけてそのれハ枯葉之　何丸

ちつて来る花をうけるや椿堂　上総勝浦町　一晁

花ちるや散るかり咲揃ひ　下総元原　抱雨

在家とハここえぬ椿の大擂一　比古

花の木を手折してみせる入日かな　小蓑

青月や淮に椿をわける髪　升圃

田の水乃もとろ日つくや明雲霽　桂房　楷山

三吟俳諧

冬風にしら燈りをさえて小松哉　蒼帆

吹れて鯰子の歩行日の筋　鳥彩雄

舟入出ス康居芋に堰を寄されて　椿堂

とれもをしさよ寿りし酒樽　帆

照る月まふらつて御ス多気粉盆　雄

ちとしの堤ハまへて倍はし　堂

末もしをの漆すて這入る秋の汐　帆

伯る手たつの遠ふ揉摩路　雄

眼の男カゝとれし娘の仕合せさ　堂

いつの隙ても縫ぬ顔吟ひ　帆

朧閑を素屋根の上へ引上し　雄
むさやくしや合鉄のせる鼻場　堂
入梅晴の庵は又なし不二南　帆
に人足の鼻へ流る香　雄
真水の箇をふらし着はかけ　堂
鍋汁告ける鳴り物戸告る　帆
今らしに当らも吉らぬ花の比　雄
筏よ茶む独活や人参　堂
出代の小布を彩む清室てきき　帆

ぬき足に付し水引の紹　雄
仮橋もかゝりかゝる役目お　堂
いく川ら年の忘れぬを貴　帆
肩あてのあらさけ緒の瓦御り　雄
履との集に條橋の箸　堂
めきしと仕あけらまさる木ばの鬢枕　帆
植木畠へ咀らくへ去む　雄
古茎をあつたてしう囲うし　堂
大屋の葬乃幡らおかゝる　帆

鮎月よすき稿書の止きられ　雄
躍のあとの柿の喰さし　堂
簾朶さけハひんまに旅し乃薬　帆
踞の腰けり足をそりとる　雄
店蔵の中にあハそのを並らまし　堂
登りし先へ待る膳立　雄
花生り取次もかくゑまて　帆
冬ハ強し尽草節まの夢　堂
右　歌仙　切

菜の花をめぐるや水の行もどり　蒼帆
何事も質を仕る暖さ　四明
番所ハ家ハ八ツ築ぬ嫁りて　楳半
郭の様を捨てふるける　帆
湯挽の絵銀まぐる月の秋　明
出たうり時のをれぬなぬ草　半
ゑ気りし花る十位も捻へて　帆
射(チリケ)柱もそれハ丁雅まつく　明
足跡の接りまとめる階子段　半

祝ひ二合の酒に墨染　帆
手拭を腰よりしと立帰　明
新しかりしまりに野の色を染　半
茶問屋の暖火も中々寒の夜　帆
僕さへあれハ京する眺目　明
月池て流れ質を買て立　半
かへて出てハかし傘を干哉　帆
山吹も菜擬もきらし花盛り　明
喰さかりて売らぬ積塔　半

花銘も忘られつまする屋袋　帆
飾わしし前にかもへ従て来る　明
手の支活て一枚若艶く行り　半
まつる嵐もこもしきく　帆
捷気も合ぬ本陣の勝手向　明
丹波者方の志しよ居る　半
こらまりとか減の薬利多は　帆
嫁の気立を参る肉を　明
日系も得ふて上り　の鬼子母神　半

つゆと萩のうつりしかしら綿　帆
きぬさけ茶をぬいて来る服ふ　明
昔かし明かし韓艶けり　坐
丁寧に盆を飾る小道具屋　帆
ちよろ／＼川にさへ出し水　明
つきさしてみえる扇下に　坐
花に浮かれのよしく陰尺　帆
ろくしに秋もふりせぬ畝汁　明
餅子をきしま人山椒よし愛　坐

六歌仙竹

小袖をおけハきしぬ桜の色　白おふ 舒六
町中よかし行も下りて春の雪　九皐
このころぬものよハあつた山桜　其布
竹たる鶯して竹くやちの梅　其琴
卯月や舟に涼まきし少さし八　茶友
富士一秋これ気よありて明峰　坂本 蔦雨
まつる一句に秋庭の海老の鶏籠　年帖
買物を忘らしまりや百の花　カタヽ 世岐

广野の萩を引起て出る月　成章

菅原の桜に詠ん景色かな　文葉

我もとく流れて出るや春の水　芸城

三井寺の新たなる桜かな　未に

それほどの世界か花よ三ヶ畑　升行

俎板をつかふ日多し梅の花　大津　一居

陽炎やうちには起ぬ隣の妻　紹湖

背戸の人峡ふるる木の月かな　皐支

柳よりうくにまの明夜霧かな　半楽

流とけやふらふらとする梅の鏡　音羽　田義

よし宗の貨けし家や梅の花　辻沢　来志

梅ちりて白の多きや鳥の尻　康志

森のひまか桜の背にちる桜かな　舟木　仙景

一日ハ出窓も切るや花曇り　破海

舟頭のままにかれける柳かな　一鈞

神桜田楽とりしも甚かりし　万丸　北馬

ちる附人のよくろる桜かれ　絶頑

ここに桜の白ひあがりり萩の墨　五平川　蕉斧

きれ帋に昔ふく秋の九本楼　秋杵

月のかゝる影そつとれ花へいふ　川島　松月

籠提て余作の寮が峰月の里　隅井

茶ハまうし志ぬりもふくて梅の花　綾歩

郭公やうに日の入るや春の山　秋角

ちよつと語らひけて鶏の橋かな　紫葭

水のうたにかりしれのさくら哉　桃屋

日の暮て人步ちし花桜の月　玉山

出物ひ志れハ桜のちる光　嘯石

風呂好のさかし盛りや夜の柳　由付　呂乙

引きらも志りて猿の柳かれ　土山　虚白

羽子つくや人の手しれる水溜り　石鼓

掃よせの砂に蛇のうつくし　梅亭

水かけて出るに迷ふや白帷　月扇

郭の竹乃二葉三葉夕柳　大の　月坡

陽炎や鶏のきさらし　仁正寺　一嘯

大觚咲える梅の鶏戸へ　七ノ　士明

白水のふれあふかし柳かな　和月

梅咲て富士遠のくや日和哉　葛麦 里童

篝火かくるゝハ風あり春の暮　町家 芋丈

古簗ふしみれハそこも春の水　女 桐寄

むつとよのとしけたゆまる柳哉　七里 巳兆

辻ならにたまりつてあるや雪の水　八マン 太令

入口て尾をたゆるや花の山　四明

花よりも草や走るとハ梅咲し　萩舟

蝶ともして稚子の舞さかり尼　寛楊

落花に吐いきつきけり花の中　桃谷

鴬鳴の尾手花のおしさ哉　仙李

扨よりて氷落るしまの山　帽堂

きのふ鶯かゝるや梅の下　素涼

順寛ふりかり立けり雲の山　白丞

ちる色や一ト昇りある嵐の山　白栽

春つの遠くきえけり花曇り　梅三

見しとハ絵もおもく萩の色　蘭月

神花や庭の掃除も日一ッさい　和翠

春雨や海集りまる土肖の家　芦洲

内井ゝころふすにある雛かな　南峨

戸を立てゝ丈婦出て行霞かな　浅小井　鳥雉

ありあふし坐て孫と見たむの君　一峰

又三日しく日もあし庵の藪かな　江戸　花君

わすまこゝろ縁を尽し花の藤　三ノ神戸　楚雀

ぬけ道のとりつきよゆる椿かな　杉舟

下結ぶより日和となりぬ梅の花　大垣　梅翁

見そふたる人とハなりぬ春の暮　住吉覚光寺　武日

みも山も何年ゆかし朧月　上津内村　素風

むらひしの栄山こえて春の水　上野一ツヤハシ　晴湖

佐渡山をこへて来て鳴小蝶かな　倉カノ　器水

わが妻の見にむけゝる鏡かな　ミヤサキ　之孚

きさらぎの井の十日や暁きつろ　洲来

十六子にあしかりぬ夕霞　上毛　分尾

陽かゝる雨も霞んで仕舞けり　奥州田名部　帆嵐

ちよつおりと坐りて母なり桜ずき　南ア　一毛

我おろ子借かへす桜の錐　照ノ沢　貨泉

黄も白も枕よりまなせん華の花　仝　一□

るの子を蓑にかけり梅の花　安積山下 可都英

ぬるしも人よけれり庵の水　金澤 一本

万燈にもとりの寒さ役ら船　魚守

畑打の伸をするさや続彼岸　新花坂 茂荊

老ゝ奥や無んとおもふものかな　香雪

春雪の残るやぬきて梅の花　南五ノ戸 青玫

家々の門にも出るや春の風　阿亀

大名行列見ひかし添生き　墨雲

時ひろりおしの雪にかくれけり　馬亭

宵月見もとうき梅の華　車丈

冷やゝに下りり水や木の芽立　理和

塚越の松より黒さよ燕月　雀秀

かも川の水ぬきるや出るの鐘　扇哉

長閑さや舟の中なる雛菜屑　樗叟

笑草や歩むにつれる虎ふり　子坤

水やうも行て時出し蛙かな　露桂

牛明よ大枝咲く梅の花　文香

表のくちらと降るとせうぞもの山　ロ八ノ戸 五楽

雪解しともえぬ日や物干竿　居眠

蕗出る三ツ四ツこえて蝶哉　一影

花見や人ハ若菜にうかれけり　志亭

八重咲やちるもちるのあら暮り　常丸

山谷に一ヶ村あり桃の花　杉田　英泉

初音のめつらに啼や秋葉山　五陵

神午や夜ハ明けの大工町　二本松　文骨

三日月の不足をなけらん蛙　秋田ノ扇田　玉扇

春ハ学の上かゝる豚生ゑ　哥長

まさかしま山の名呼てむの春　出羽茶沢　以文

さして来し苗の戸明る桜哉　若狭西津　若里

鳴ふ梅まかされてるのまよひ鳴　越中文　巣雪

鶯の体みて飛るや二ッかし　女　方数之

人ハ一月いちぬ比ふらし哉　巴拙

新森もる家きまもいありもの雪　笠下

家の花や出て見ぬ清海屋　之道

掌や泳の上に泥のさし　小濱　大郎

揚きつし風ゆまかるや峯の雲　椎山

漕舟のありし書きに霞かな　可樂

竹ことせハ一服すゝし梅のもひ　越前丸岡 友圃

出て守ハ庭掃あり朧月　壺中

柳やとのまへるの定まらん　之水

梅咲や老に皮よせて流る馬　加賀金沢 年風

三足めに花や椿の咲れ下手　露杖

忘の梅きせるをかけて枯る棕櫚　棹水

氷若ふ僧のめくるやむひの新　素洞

向ふかし梅ハ白ふてまとる道　佛布

わかまた蒼ひ老もひきかり　逸亀

森にほなる人そふくれ梅小月　扇路

妙なもしも梅ちる夜のかりさか　馬丈

其の名濁りまさらぬふられかな　桂洲

其名や忍ひのまゝに日の当る　一杏

わかまゝハ葉ふらちりて帰る桂哉　柳更

出りさきもりや家井の三邊さくら　素文

落ル巾の位義して居る小笠哉　少年 茂竹

松ふ子の給ふあつしちる梅　白二

行そけるれ道八ちらちら桜かな　立舟
菜の花や下り口まで白ぬも滝手　完史
峯やに傘まで深める路次の口　節斎
花さやか家のうしろハきさら孫元　周来
折て来て花へ屋ゟに桜かな　高舟
僧服の前をつゝれ法ぞめかな　秋平
舟ひきの宿も形戸切る柳かな　禾暁
袖引て夜さんもさくらかな　紀雪
のんびりとしらしる老父の遊かな　風戸

池遠き杖に雛のこけあふ　雪霽 和多
さりきりとして八桜を思ひけり　可陸
ちく来て筍まあ東に桜かな　太甫
肩よ跡のせてかくしみる桜かな　玉麦
夕暮や桜の中の蛇の声　一洞
門口よ水もらしるや梅の花　東堤
隣にも宿ある方の法ゟかな　三志
池にもかより来て人をはれる柳かな　一雄
菜の花や服せんにありて来まさ文　湛亭

梅はみしらぬふりして茶の花哉　晴霰

寄かゝる枝もむつかしくさの花　居童

土よりの来てハ此ハかに柳かな　歩兵

おしけりて葛の花しても来れぬ　可杖

大名とも見えむ薺の松子哉　如翠

まんろくに暮まはりぬむかへ哉　湛翠

桜く来て又見るや田の柳　鶴池

松明をけしさゆあり山つゝし　竹雄

鐘の来てたちくてる乙鳥哉　去年

夕桜縁よくめぐりしたそこの影　此水

ぬき捨るその下より竹の蛙　波英

家二つもちまきれ花の中　紫宗

たまりてハ人の通しぬ桜かな　葉枝

咲たれて茶弁の出る桜かな　葉笑

折られハこゝに捨くる桜かな　超翠

七種やまた仕舞ハ供結ひ　破窓

手きをあけしふやきの奥　珠蓼

つく杖にちらしのこゆる桜かな　素桂

花の山等ゟ文度ハあちりけり　文艸

笠揃ニ恐るゝ花見のむしろかな　字牧

ひとりあるく雲やまるうし空の月　黄年

雨ニ菰くゝまる家あり山さくら　宮ノ腰 青崎

常や煙まはりし ふミし在所　霞堤

わすれてのちもあつりひとしき桜かな　春涯

千羽雀時ニ追ふ泊りつまきなし　几調

椽先へ来てハ余寒のはしめかな　常松

うつかりと一日過てぬ春の日　卯毅

常八何吟てまし雪の山　巨山

一村ハ拵きぬ家ニ梅の花　巨泉

假のさうさわれふし花の最中　亀巣

鉄炮の音ハやミけりもるの月　小マツ 亀蹊

風ふ花の香りニ余寒の並木かな　亀園

まとしきニ来て為まとり蝶二ツ　花郷

木の枝をくゝりてハ折自由うち　琦山

田の松乃春ニありて見舞けり　草紫

前一日揚て出し幟の旗　呂柳

川留の暮方所や花に燕　里鮒
桜れまつとかくされハかりし信　山中 素竹
曳杖の参ハ多し梅乃花　串 一行
曽利のころひとりや風のそ　東桃
里ありと志まてる山路のつゝあかし　大正寺 北園
凡ゆかろにむかふたころや墨木の灯　石羊
水の札恵しいふや花もとり　菴流
藪入の出まちころあり墓参り　丹嶺
見ことませる布施の奥乃桜かな　呼之子

清水や楊の下うし出つらん　豊收
涼西のうの出ぬ退庵や春つまき　二乃秀
一きまきれ花ありけら　祀竹
紙きぬきの織りさまにやの雀　白令
暗ほとの面乃志もこむ柳かな　魯石
あしまよくハ地尻の柳うか　蜂舎
四五人よ花せる表花あり七の石　末雄

歌仙　表

落梅咲ものの末の露おさへけり　素芯

来てハつもめのとことん傘行　荏流

筆走く留守居住居に細波て　呼亭

むらうるき土篁の跡く　蒼帆

月の比まいきりしきハ旅のあく　十丈

立てをとりの下あらしきり　千崖

下略

火を帯て春のうちの筆し桜かな　ノトハキ 李丘

荊坂やされとさんし帷のまゝ　梅咲

花咲て遠しき里の次新かな　子梅

庭よりするる上あり神勝の灌　杏園

此の家も梅さへあり谷戸ハ梅花　花溪

湖に出湊もありて花見の花　二芳

月の夜ハ梅て招なり荒畠　カサシ 梅雪

出舟に孫ハちり色梅の雪　春鯉

雲月ハちりとこなる柳かれ　ヨキノ谷 思文

ふみかも来て顔ハ月と梅　川尻 梅嶺

参とまて銭たまへ寿かな　出村 稚琥

若草に雪のあしあと小坂かな　中ミマ 心龍
摘ためて何とか捨し菫草　冠李
退出ハ車に灯あり妻の戸　九皐
隣かし折らる寄りそ梅の花　北世
鶯の啼や襖をたてゝむしろき　其丈
夕月を芋子もよくに咲雪雁　ニシキ川 大路
舟つけハ松原のかゝる舎かな　八十三 松雄
秋持てそろし出る梅の花　ウ川 白史
折る枝ハ花のまゝしあまき桜かな　翠屋

はきんてハ雪きしまとし落椿　二ノ宮 冬秀
春の夜や風呂たき見る一番　七尾 樂齋
三日月よ仕てまゐる乙鳥かな　竹嶋
つくしつんで鶏を定め兎もの中　国之子
素麺かうとしよふ柳かな　六皎
船から満しさぬけて鮭子の声　越中淵山 沙升
いましまた服装下立る萩の春　黄居
鶯や傘させハたまのもの　尺蕭
長青頭柳お尻まきつ姫よりり　蕪村

庵の幮掃ふも芥りふ是　几丈

貝売をまねきて並や花の宿　木司

梅よしく隣子も持ぬ在所哉　松寸

鶯啼や出張し山の隠日南　如寥

是なや上なかりし花のさかりかな　あさむ

梅か香や人声きゝし低小屋　福光 幹古

三日月のもしぬハ寒し春の水　魚津 孤山

猿曳の扇子を並や縁の上　乙雄

ちるまりと冨士もかすむや在所　写水

一仕舞膳つけて夕ばかり　宇玄

むらしとしも相撲もあらず哉　三国 孝車

方丈よその寺やちる桜　和泉 東川

吹かけの光さえて夕柳　杉川 双水

照なからも猿を取乃り　吉久 保久斎

淡雪や鴫にほ寄れ四五羽　一暁

二タ沢もるのつゝゑるふもとの苑　マシマ 其叢

片陽にさかき残りて見ゆるの山　放生津 玄弓

一世帯してゑしゆきし椿かけ　福町 路三

汐先を川へ返る乙鳥かな　今石動 放古

秋の戸や峰を字ハむのかす　越中高岡在 石嶺

梅をうつやうしろへ出れ小脇さし　天台 万里

出居一ヶ所あたゝかし兎かな　小洋

うつむけハ勝手ちりくる桜かな　加茂 車十

毎朝この道水ハ落る槙の継　雄柳

日の入し様もあつらし春の海　誉素

もの様気らくになりぬ春の行き　村杢 北披

花を出る春の光へやふ摘り毎　遠丸

春の水落合ふまての打方に　市桂

春は入て鐘つくちのさくらかな　蓬亭

和らかに日のさし花の木下かな　糸井川 月宮

住す花に宝家の流れもかな　三甫

海かし木の芽まてある桜かな　宜雨

恭く暮ハ咲き起されて落の花　其誠

永き日もへ暮うつおもふ柳の日　士賓

春雨や昼出歩けて草かる　敬甫

田の人乃雨といいてね来る　宜来

みしかく縒よつていまし柳かな　尚古

花の宿挑まぬ膳の跡まかな　曳尾

花盛り鎌なししてを切りにける　上十日市　守白

名もしらぬ菖蒲なしひろり妻の水　高田　甫十

切る絵の窓に紙なし花の雨　丹八亀山　蹄揚

出代や支度してうしろ隙　保解

花多くあるう舟子も様子かな　古人　阿翁

花の香ちいさき旅の硯かな　你尾

下る先八人もかきくれ日の花　篠村　蕉叟

ふる日にまつや花見の肉料理　保り　梅居

人影もうえゆりかけや花の中　烏舟

日雇等の手や仕舞うる柳かな　半山

花を見て戻るや背負ひ八百ある　山本　其朴

花の中手鼓姿かさけて通り先　仝

横樋の桃引先や猫の恋　三路　茶勝

山荘や暖のもよい神さまり　臥雲

寒の兄今宵桜や欲日され　須和　俵丘

里あれて寒から日みさきかな　福住　知足

出水擬ハあられと尋ね柳かな　（笹山）風雯

更庭ハ女まうせや垂れかゝり　箬雪

まゐるとやせハしき音も水車　田城

霞まれて十分舟に森かる兔　兔秋

菜捨に出て春柳に咲まゝりり　観之

親もなれもちるちてゆるされる子　亀麿

十分の花に一舟おろし春の祭　（里井）露光

常の時ても廣し殿の留守　（大山）武陵

遅留の宿の落合ふ二月かな　（丹后田辺）似藤

辞退なく四吟て老る秋布かな　葉久藤

折とよせハ梅も桜のちりそめり　一葉

大椿しなりや春に盃けふかゝり　雪蕗

雛子咲やや矢をつく枝より舟　小亭・

つゝまて来て盃ハこゝにもなる鯉　雙

傳るもとなゑて昔ひ人たる柳かな　蓮山

戸あくまゝハ桜咲出る此住まふかな　白水

常の友よびさそや飛お中　柳圃

明後日延陪座の春日かな　極之

ひんとうとはや枝を折り将　赤梅
傘の下出代ものたれしかな　董良
さして来し当の戸明る桜哉　文り 菊額
菜の花や松も厠八背に合せ　素白
山ちるや只の樵小鋭目さし　瓜涼
毛鐘にきり乙木にかはるちる哉　無角
当ちりけに太くゝ残し桜かな　休公
八重桜三日月負けて静かなり　也風渓
きの庭さくにつくしの山つゞき　一山

春の寒さとまる田ふまえて春の戸　東翠
舟のいろ竹のにほひける桜かな　守平
ちぎりさるあるりうし燈かな　四辻 松舟
旅人や柳くゝよる横小路　君友
障ることもなくて柳の大西道　小柚
柳折るとてもたゝしと上包　里橋
朝ごんと将きるときさ桜かな　松雫
小庭てさる寂越の花ちれかな　中渓 遠花
歌しきハ雨とし桜のありかな　河辺 玉芝

並松の揃せて佇し雲の月　中丁
七種や歌子をしへる雪あかり　秋観
梅咲やむかし隣の能森なき　其夕
ちるかつて川の流れし汲干ぶ　菴月
汲あとを掬て孫もや春の水　金英
藤茎て赤みうつるさくらかな　峰山 青芝
常に良那の袖をかし菜菓　白砂
咲ばより萎て幅ある桔かな　但馬出石 黄貫
茶筌の揚て通ふや子のあそ比　二扇海

苗代やいく所も仕切田一枚　竹裏
きまゝ風巾の帆柱ま乗てかりかた　古岸
鳴蘇の角も落かり伊都岐嶋　霞城
いかめしき森芥や庵の花作る　金月
笠提て立人もあり雲の月　地原 廣若
川高く隣ありかたなるの月　一之
柳みて孫まで八重なる流しさ　村呆 柳眠
秋蛙火をまず稗のおもしろき　魯今
絵声に営刹る発文至那　蚕亭

芭のや非と並ひて切り乃え　日カ 楽山亭

花乃影収めてある夜の長刀　浜坂 羽長

晦る梅や咲て八吐ある池の鵜　東 巨雄

踏てれ水に姥るや春の月　月亭

春の夜やもとりてハ本き田の小橋　伯州米子 孚晨

歌村へ行りも春也や二日ゝけ　淀江雲阿 □條

田の上におとろく表あり梅の花　今ツ邑 とミ女

春の夜や傘かりによる畑の家　雲州母里 亮□

傑うしろ家もといふや乙ちかるも　先原 春濤

鶯や音もしきき寺の内　只虫

立ならし佛をおかむ花ざかり　石州矢上 梨堂

あけありに堇摘むや日の奴さ　芦青

花の夜ふつくより織つけ鳥　播州姫路 芳夢

春の闇てちらる花水を落て川　茶田

夷曇の屋まつし蛙とつき　布薫

春柳や人まかしき日和下駄　古流 修り

青柳の桂ょそひぬき錦つる　魯柱

山の家よむとり流るも花盛　守一

蛤ヨ雀の多くも余りけり　古川 薫陵

雛子啼や日和かゝる茶木畑　芳洲

簾の角につゝり落て日なれけり　糸山

青柳やむかしの恨ありさくに　女 村子

若草やここよ家の迷ひたし　左栄

拵しまりや夕アの鞍子の妻　ヒヱ 桃舟

当代やかさ帰之海参の掃れ　古谷

残暑あけて鍋も撒ふ屋敷かな　敬文 鼓吹

さむしろに行尻りけてたつ衣　ラサ崎 五芳

掃先へ吹の出してある夷かな　中尾 千尋

手作して小僧よ其れ柳かな　奥崎 芸之

勝手より八人の姿ぬるむ梅　御手 似文

梅うるや子供の多ひ一軒家　ヒメ 其昭 隣学

水のうに出て月もおぼろ山の鞍子　ツ一井 六英

黄昏を鐘うなしせる梅かな　役おく天王 好耕

水ぬるき二月酔るりちる桂　徳末文内 蕉雨

茎摘ておさむれたるに戻りけり　トモ 應雅

傘の古骨買ひやまさし　立

手にとれハ月日もあり萱屑　青鴿

雲雀鳴りや典奥の継志さり　アキ廣島 斗為

梅のえて人て戸出るや梅の花　雪頂

水際のぬもて見よるの霰かな　因影

いつしいて肩よ上るや梅の下　玉相

常の神寿に見えし能乃月　文路

芋摘や我もおそれし捨ひ杖　不朴

るくひの噂垂しうりぬ今日　白尓

春うけやたし蕗の葉もちをなり　三蔦

冬籠し私の碇りおほろ月　周防室ツ 雪糸

常らにありもされぬあしさぶ　白松 英芝

波きりし岸よしくや神霰　鼓吹

松緒よとりかて居る蝶かな　上ノ関 栗生

傘きいて通れハ落る椿かな　史鳴

ろうや花ふられて居る舟の宿　長門下関 岑磬

つ出や手ついてよ掃桝の蝶　益三

猫まうしたる入るハらうぶ　淡路須本 方壺

蒲ろ英よふうみて出や山風呂婆　アハ 青荷

呉竹ましる蕾の折しや白の上　雪巣
家猫ハ遊ひ出て雪ふりけり　友進
きさ乃中の俤うつまて出れ鬼　向栄
ひとつ町の書ハ一つて桃の花　梅守
小庭ふかくのよき河しさや朧月　サヌキ旧内 其岳
菜の花や日暮て戻る庵の犬　玉瀾
風の手ハふせく山あり花の宿　稼耕
砕きめに見て孕る家の柳哉　三松 三子磨
三日月を見に出てかきぬ蕗の薹　下総 義尭

夕暮れや色陰の月よろし火　由喜尭
木挽等も手ふ休むや梅の花　白雪 李上
菜の花にたもり貝の青鷺　曉月
落る時鐘のたねるつきさ　和田濱 冬是
茶畑に清たらぬ鶯の出れ哉　丸亀 木長
梅をもく家の夕霞やにの匂ひ　杏坐
湯治せる人足や梅の花　一斧
あらしきこ戸の明るてや春月　芳三
鶯の折きまりけり数つとき　蓑蝶

すさましや加茂川越る猫の妻　茂推

鶯やちからもいれぬ鐵きひ　イヨ大洲 一行

乙鳥の並んで啼くたのしいかな　木兄

星かくれほどの曇りや鳴蛙　桑戸

猫追ふて出る戸口や春の月　英九

面白さて鳴ることめつゝ櫻かな　象外

鶏子鳴や吸付て出るたばこの火　松年

蝶の舞ふとて鳴る障子かな　齊雅

梅を折そつらに越る小川かな　齊窗

川汐のきくともみえぬ夕霞　泉谿

春雨にぬれきる菅のかさかな　蘿山

大きうな大工つかひ梅の花　蒼頂

居茶に枕さうかや面乃茶　嫁暁

名ごりとも志して畑打男かな　宇和島 素亭

逢よふ日のおまれは花の盛かな　呉天

神にたよる明るさへも彼岸の日　大井 烏朝

山鳥の尾を引ちらや面のまれ　樋ノ口 井峨

勝来の鳴る鐘樓や梅の声　三ツ沢 郊馬

見て来て花のようすを吟らん　川口　二島
捻きんし蕗の匂ひや勝手　吉田　鶴雄
嵩より八幅に流れて春の水　石漁
折てみる桜にも日ハ暮にけり　蟾居
長日や泡のふくる芦の中　鉄家　士焉
筆塗る人の来て見る柳かな　月平
一日を花に名残の惜しさかな　甫六
あとさきも花になりけり桜の枝　雨坐
掃よせてこれハ雪ある椿かな　素萍

小机もかへ出しける桜かな　亀笑
端ひよつ抱てまゐる桜かな　嵐尭
永き日や幾度か掃く庵の砂　呉蔦
並吉に机に蝶の孫ふりかな　柏翠
鳥の巣や菴出よと翁の袖より　文雄
枝折戸も明てあるなり姿桜　呂舟
藪入の足あけてみるや庭の松　桃下
苗代や鷺舞しに来る小鳥　鶏郷
春の水流つるまけハ濁り色　漁洋

流れ出て月も磨かる昼の水　樹幸

門並のうちはまれぬ藪かな　香輔

藪入の隣まで来て暮にけり　石居

茶代の日和つゞくや水の池　代酔

鰐口のならしきる音や花盛り　鶩友

垣越しに香梅咲ふ小枝かな　若拙

跡先のさまして詠やる庵の春　自考

のし附し梅のつぼみる戸口かな　立沙

花茎はみも綴りの色は紫か　進山

洗ふても温泉にて仕舞ふ春の宿　臥山

春雨の中や風呂屋の行通ひ　石岱

初花や声し引潤る小石川　松二

傘さして一万筆通る日影かな　青鶩

梅ちるや毛の流れ垣の外　竹舎

月さしや堀捨てある花の門　南磯

春の雪ありゝみに雪降る手枕かな　一縁

播かけて傘しほむ若菜かな　女　惜花

えりも廉のあとに行る白魚かな　宇逸

梅ちるや人乱るゝぬかるみ比　和凡

垣ありて夜役ゆるや梅の色　野竹

神花や筏のかゝる山の間　五岳

足もとに海苔かきよする暑哉　遅柳

恋猫や暁まきし窓あかり　蕪園

新白の妻に柿やおぼろ月　紫扇

持かえる枝やまだしに得手の雀　那小

入相の本きほし花の雫哉　松嵐

二三本松の月よき漣かな　在京 尺步

夫婦くにみや桜のひとしきり　畦籟

小家毎に火をとる花の乞食哉　斗丈

少ひ称り不料理の炒にも哉　秋月 嗒然

水霜は黒く持りゝ萩の花　鶴史

月のさし門はおしてものちる　筑後柳川 幻化

なぬこしまし花を出れ山鶴　久枝改 文尭

春の日や画扇文有子寿せつき　豊前小倉 木又

春月やおくれてひとり花戻り　巴山

をよれは扇も立るけしかな　可推

ちる程や四方の遠目の松と家　村雨

滝つ瀬のりつまるや花まくれ　四友

舟うしも来て究一や柳かけ　豊村

吾心の花より高し大平楽　里山

神花の柳しらふして静なり　松風

存外ふるへし出て夏川　木斎

草の泡吹おとしや種子の声　田
砂水

りん来鐡をしむや秋の横なり　豊後日出
懸壺

神来風や塩魚つらふ漁の家　濤風

是きりてききもちる袷なんぞ　日田
琴角

ちりかゝに身を投むや池の上　雨芳

牧欄も日常ま出より梅の香　肥前非代
素耀

来さ草をたえへても萩只草つゝ　子丈

ひまの誰気にも今ふ糾繆　稼祿

彼岸よりて居出へ出る新菜　涛堂

苗代や堙家しるしてえて白る　濤海

行里の几巾並ひたり海の上　冬耕

浅之雪や租書のかきそるの坊　和雲

桃咲やくゝき縁を賣に来る　柳甫

山高くに猶佐るハあり春の月　雲林

遠出りして摘まけるや若菜哉　大村 悠々

行春の松に立つる箒この由　ホサキ 其映

彼のよるはしきを家む淡路山　畏曙 尼崎社中 雲峨

ちる花や春の名残も扇さけ　砂樂

堂にさかる萬あるもられけり　五百羽毛 連史

暦にハそきき日もあり梅の花　都蓼

青柳に何もおほろもかゝりけり　東六

梅の色雀とまりてもさゝれ哉　羽玉

山鳥や桜咲出る笠の手　如雪

嬉しさの聲きく花の蒲團哉　樂之

鵺啼を擔集めて松(チドリ)鶴哉　巣柏

子梅に明石の船をとゞめけり　流水

あらし後や月ハ山際におほろなる　百枝女

真白や河へ人に春し秋の足ハ海　芝月女

美しき水の萬あり朧月　花夕女

船泊よけ花に老木ハ余所なり兔　希石

春は清くこゝに葉しや花の色　一桂

永き日や戸々にきこゆる舞の鼓　嘯庵 梅調

行向ハさゝき雨あり梅のくれ　肥後八代 雲笠

分をわけて衣かをまつや神さかり　在京 白扇

神花や流れハ淀む小板橋　日向 渓尾

今ハも又出て居るや花のうち　南丸

小波の正月かりや今日是誠　季蒿

狛鳥や夕栄へもあきよ小篠原　習之

雛子二つ並んで吹く風ありけり　若狭 吟影

背一ツひのひて岸に花の庭り　外 云界

常よめくりあひなりぬ山　壱岐勝本 青也

山吹をわり是ともや鮎の峠　雀二

青柳の下をくゞらし小舟かな　桃水

桃咲の庭りかしら花乃雪　梅舟

笑ふ子の中をとも年の暮かな　文耕

蝶独入るや雲衣の花の中　対馬 東指

木の芽や茶屋を下り人の声　大和村 牛父

わらふ松のかけあり勝月　吉野 也亜

戸口まて橋の先まて吹霞哉　都牛

ちる時ハまて志もしらす山桜　虎旋

若草に家一軒の日和かな　東叡 橋枝

鶯や鞠ろ跡乃まつひ乃時　河内守口 梅古

春雨や森かくしゆく船乃順　き如女

菜の花やまても借入まぬ一在所　山城伏水 光山

見えて旅るけふろ帯一ツやおち桜　大津 湖月

家居や森ても見えてきむ明り　呼続 丈翠

竹の根にちよつて小見ゆる菫かな　月峰

夕暮や引とむしためて行す雉　百池

楚まりて行や蝶竹の下あかり　金菜

石なうんとまゝ彩ありて帰る戸　貨僕

余所の田へあまれる春秋の柳かな　麓雨

花山やとをよりハ遠いこゝち　凡中

あとりきの霧むらも似ぬ千歳哉　梅通

撰す摘よまり背戸先の若菜哉　並隆

餅をせれハ鶯去て仕舞ひけり　芹舎

見失ふ帆先へおりる雲夜かな　芳英

よき里といはれたしや麦の秋　几乙

咲花の混雑もなく淋しさよ　若雅

出口かし風呂敷よしや花の笠　南溪

もろ○錦の汁こぼして柳かな　十海

下駄ぬいて不急なる汐干かな　麦雅

腥い茶の辛抱もはなれけり　蘇杖

帷ふく家となりけり須戸簾　草鳥

夕風の送りてや浮雲の峰の塔　喜楓

人まつて花に塞りありあらし山　岱英

都と花ハよそ目もあり夕桜　醉秀

ちらちらと見えつ花に夕念仏　秋禾

柳から下へ八百のつらねかな　来元

東山で暮てもよしや神なかり　遊蝶

寒竈のあと〱たまりや雪解水　梅舎

温飩屋の絶えぬ物もあり朧月　孝平

降りまてハさそれしおくや花遊　よし女

桃咲やつまぎの川にたて一眠り　三保女

人声も昇る桜のさかりかな　とせ女

掌をとくと言せて掃除かな　呉明

むつはりしき都かりや京康　紗六

包角して夜の定らぬ梅かな　杜鵲

形草を奥蔵のもしる家かな　杜琴

風中にとつけるたよりの山路かな　梅價

雲中の宿に日当るひなたかな　完和

気の済て棒よまぬ花ん盛りかな　祖凡

見切先の付て見落は梅の花　楳堂

有浮とふ咲てまたかなし躰の花　鳳也

杖くれさ寄て休てまた川さくら　千崖

茶よみるはとへのうれて山桜　蒼帆

追加

春祭りとあるりや花のちり初る　イセツ 柳梅

きよひ人にれもて名や梅の花　尾おチコヤ 団子

春旬や晴て里に遠ふ夕けかり　如柳

大川をわたりあちこや柳堂崖　万年

浪の際やまこむ世しに寄つなか　梨陌

草の花やきらひ水うも日のあたる　芝角

あれちや菜畑に雪の消残り　李裳

鶯をともしゝはたゝしら霞哉　梅園

山坂やさくら咲けも花の奥　イセ山田　四溪

流れに笠を渡すな春の舟　丹波舟木　野卯

戸はなれて見てハよりそふ梅の月　ハリマ　杉堂

土雛菜のいきつゝ沸や花の本　渉如

霞もつ帆舟見えくる春のくれ　南溟

あけしもへ花や躬うし雲雀かな　石見　芦書

梅折て終ふ庵ちれ田舎名かな　常陸小川　占香

ぬよけし出て何か飲けり墓参　天草大矢子　正焉

よしきりに濡て気しやもの雨　下総沢　雨什

見勝手に勝負しけりや梅の花　葛西　松什

乙鳥の水をうてわり日暮けり　少年　濱吉

菜苗や泥手にむすび稀なり　オウ　津軽黒石　茹末

よの枝もをりふくれし梅の花　二本松　乙調

やはしと水の流れし萩の花　ハリマ奥津　文沙

鄉月萩か明られハ泥の春　居易

明桶に厚となめる余寒かな　カゝ金沢　北洲

京東洞院通
湖月堂
御摺物所
菊屋平兵衛
佛光寺上ル町